



謹賀新年

あけまして
おめでとうございます

今年が成年です。犬は歴史上、人間が初めて家畜として飼育した動物です。犬と人間との関わりは歴史は極めて古く、約40万年前の旧石器時代に人間と犬が共生していたといわれています。

狩猟生活の時代では犬は絶対の相棒となり、人間は犬という相棒を得たことで、狩りの効率が上がり、人口もすくすくと増え、牧畜や農業を営むようになり、犬との共生の絆は一層深まってきました。

現代では人間社会にとつて不可欠な存在となつていきました。

今年「犬年」。猿被害の少ない年になりますように。成年 元旦



イノシシ 市街地に出没 人身被害多発

近年、イノシシが住宅地や都市部などの市街地へ出没し、人身被害や生活被害などを引き起こしているという事例が連日のように報道されています。被害状況を全国的に見ると平成28年度では

編集責任者 山村 準
tel:0595-63-1725
Email jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会
発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：60部
つつじが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(10地区)
名張市議会：20部
名張市役所：20部

でしようか？。固体数の急増に伴う生息域の拡大が主な要因といわれています。

今後、中山間地域の人口減少やイノシシの個体数増加が予想され、イノシシの市街地への出没増加が危惧されています。

警戒心が強く臆病なイノシシが理由もなく危険な市街地に出没するとは考えられません。イノシシは奥山に棲んでいるというイメージが強いですが、実はイノシシは山間部でも人里にかなり近い位置で生息・活動しているのです。餌さえあれば市街地でも生息できる順応性を備えています。

特に草むらや藪が多く餌が多くある地域ではイノシシに遭遇する可能性が高くなります。

近年、イノシシに限らず多くの野生動物は野生本来の姿を失って、餌と身を隠すわずかな場所さえあればどこにでも出没し人馴れが進んでいます。非意図的な餌を街から無くすることが重要です。イノシシが市街地に出没には突発的に出没するのと、人慣れした特定の個体が恒常的に出没するという二つのパターンがあります。

狩猟や有害捕獲などで、人や犬による追い出しを行うと、パニック状態の個体が突発的に市街地に出没することがあります。特に手負いのイノシシが突発的に現れるパターンが恐ろしく、人身被害につながることも多くなっています。

移動ルートに手入れが行き届いていない、道路の法面や河川、水路が挙げられています。生息域と市街地との距離は接近してきています。

イノシシの市街地出没は、被害を発生させる点では農業被害と共通しますが、被害認識には大きな開きがあり、街では住民自身の問題としてとらえる意識が非常に低く、全て行政任せという意識が問題視されています。

自衛に対する意識高揚を図り、市街地出没についての現状を市街地住民全てが共有し、適切な自衛体制を整備することが、いま求められている重要課題と考えられます。

また、行政機関は、緊急時でも適切な対応が行えるように、警察や消防、猟友会などと連携した組織をつくり、対応体制を構築することも重要なことです。

減らないシカ ジビエで解決？

野生鳥獣による農作物被害は、昭和55年頃から目立ち始め、21世紀を迎えた頃から外来のハクビシン、アライグマなども加わって、爆発的に増えています。その被害額は200億を超えるといわれていますが、この数字は小規模な被害や家庭菜園などの被害は含まれていないことが多く、その5倍にのぼるともいわれています。

獣害が収まらないのは、生息数が増えたからで、環境省によると平成25年度末では、全国の前年比で約30%増加したと推定されています。イノシシの推定個体数は約98万頭だが、長期的には増加傾向であると推定されています。なぜ、これほど増えているのでしょうか。産んでも死亡数が高ければバランスが取れるが、温暖化の影響で死亡率が低下し、餌が豊かになったことが指摘されています。

戦後、植林された森林は、いま成熟期を迎えています。人工林には餌がないと思いがちですが、林間に低木や草が生い茂り、餌が豊富になつていて野生動物の増加は止まらなくなっています。

シカは林床のササを食べることで、種子の芽吹きを助けて森林更新を促すなど、野生動物は自然の生態系を構成する重要な要素であり、国民の共有財産です。生息域が確保され、人との距離が適正に保たれていた時代には、このような問題は少なかったのです。野生動物全てが森の一住人であり、生態系の構成員なのです。

損なわれた自然の摂理の再生や自然のしくみを立て直すことが、いま最も重要なことではないでしょうか。

国は、いま増えすぎたシカやイノシシの駆除に「ジビエ」に力を入れ始めています。

「やはりジビエには非常に大きな可能性がある。こうしたことを再認識をいたしました」。

4月27日、官邸であった「ジビエ利用拡大に関する関係省庁連絡会議」で、議長を務める菅義偉官房長官が述べた。内閣官房を中心に、農林水産省、環境省、厚生労働省などが連携し、流通や加工体制の整備を進める。4月に2回あった会議では、外食や学校給食、ペットフードなどでジビエの積極利用に取り組む考えを示した。政府がここまで「前のめり」な背景には、農作物被害だけでなく、200億円近くになる鳥獣害の深刻さがある。2013年度末、年間の捕獲頭数を2.3倍に増やしたが、個体数は減っていない。その対策の切り札が、ジビエの利用拡大というわけだ。農作物を荒らす動物を駆除し、その肉を活用すれば、被害額を減らし農村の所得も向上できる。人材育成や関係者の連携強化に必要な対策を国が講ずると規定した。

(朝日新聞デジタルより抜粋)

だが、はたしてこれが対策の最善手でしょうか。これまで国がとってきた獣害対策の長い歴史を振り返るとき、「行き当たりばったり」の感はなく、大きな不安や疑問を感じることは私だけでしょうか。ここまでおおみえ切つて公表する前に、実現の可能性の検討・細かい部分までの詰めがあつたのでしょうか。

昔は、人間は平地に暮らし、奥山ではそれぞれの野生動物が縄張りをもって生活をしていて、その間に見通し

SATOYAMAの重要性

里山という日本語が SATOYAMA と表現され、COP10を契機に里山の生物多様性の観点から環境保全に関わる役割が評価され、日本国内のみならず世界へと広がっています。

日本の里山は、適度に人の手を加えながら農村の暮らしを支えてきた豊かな自然です。

その里山がいま荒廃危機に瀕しています。1960年代半ば以降、貿易自由化により安価な外材が入り始めたことなどによって林業の衰退がはじまり、同時に中山間地域では過疎化の進展などで里山の保全の担い手がいなくなり、多くの里山が放置されて荒廃の運命をたどっています。

里山とは、山とは言うものの地形的な山そのものではなく、自然林を徐々に畑で野菜を育てるように育んできた山林を指します。

昔は、人間は平地に暮らし、奥山ではそれぞれの野生動物が縄張りをもって生活をしていて、その間に見通し

が良い里山があるという環境で、里山は防護柵の役目も果たしています。

高度経済成長期、農村の近代化により燃料革命、肥料革命で、それまで使用されてきた燃料の薪・炭に代わりプロパンガスや石油が使用され、薪や炭造りが行われなくなり、化学肥料の使用が増えて草刈や落葉かきで作る堆肥が使われなくなり、里山とかかわってきた人々の知恵や技、考え方も忘れ去られ里山が放置され始めたのです。

昔の里山は、多様な環境を維持して、その環境が多様な動物の生息環境として機能し生物多様性に大きな役割を果たしていました。以前は身近な存在であったメダカやホタルなどの生物をいま見かけることが減少しています。

人々と共存する関係で結ばれていた里山の多様な動植物やキノコの多くは従来の人間活動がなければ生きて行かないのです。

里山は、在来の生態系や景観保全に大きな役目を担い、下流域に対して良好な水環境を保全するためにも、重要な役割を果たしています。

また、土砂の流出・崩壊の防止を果たす機能も有しています。さらに近年深刻化が

進む獣害にも緩衝帯としての機能も大きく、里山の果たしてきた役割は大きなものがあります。

国土の約4割を占める広大な里山が荒廃の危機にあるということは深刻な問題です。

SDG10以来、日本でも里山は、持続的な利用が可能な資源として、あらためてその役割が見直されつつあります。

里山の健全な生産機能を再生し活用することこそが、山間地域の活性化につながる道でもあります。

里山がもたらすさまざまな恵みを再認識すると共に、地域の宝として次世代に引き継ぐことが、今を生きる私たちの役目です。



光害の話

最近、空を見上げても星が見づらくなったような気がしませんか？。それは街の明かりはどんどん明るくなっているからです。その光は地上だけではなく、空の方へも放出されていて、人工衛星から見た夜の地球は、陸地の形がはっきりと分かるほど明るく輝いているそうです。渡り鳥はしばしば夜に渡りを行うことがあります。その際、星明かりが飛ぶ方角の手がかりとなるが、異常な明るさが鳥を混乱させ、都市に迷い込み、ガラス窓に衝突したりして、命を落とす鳥もいます。また、人工光は

鳥の繁殖にも悪影響を及ぼしているともいわれています。

農村でも不適切な夜間照明のため、蛍など夜行性の昆虫の活動が阻害されたりして自然環境に大きな悪影響をもたらしています。路上の水銀灯によって、夏野菜（スイカなど）の生育が悪いとか、コンビニエンスストアに隣接する水田の稲の生育不良や、ゴルフ場のナイター設備による農作物の生育不良など光害は広がりつつあります。

観光目当てのライトアップなどは光害の最たるものです。

人間が人間のために行っている行為が、自然環境をどれだけ傷つけているかを、チャット胸に手を当て、考え反省するときではないでしょうか。

冬場のサル対策

サル対策の最も重要な季節は冬です。冬場は自然界の餌が少なく、冬場にサルたちは節を節約するために、冬場に餌の確保が最も困難な季節ですが、近頃のサルたちはその食料全てを農作物に依存した生活をしていて、サル対策の基本は、農作物への採食機会を減らし、人庄により人間に対する警戒心や恐怖心を高め、人間とサルの棲み分けを図ることです。

冬場は春の出産期を迎え餌の摂取量が多くなる季節です。

冬場に栄養価の高い農作物を摂取しているサルは、初産の低年齢化、出産間隔の短縮、死亡率の低下などにより個体増加率が上昇し、それにより被害が増加することに繋がります。冬でも畑には、野菜や柑橘類が実っており、格好の餌場です。

サルに食べられたら困る物は収穫用の農作物だけではありません。人間にとっては必要のない、いわゆる「取られても誰も怒らない」餌をなくすことです。

サルとの棲み分けを考える上で、冬場の被害を減らすことが最も重要なこととなります。

名張B群移動状況 平成29年11月22日～12月20日

指導員報告

B群は、11月下旬には宇陀市室生西谷集落付近で受信が多くありました。

12月初旬からは上三谷から伊賀竜口を通り宇陀市室生西谷集落を行ったり来たりを繰り返していました。

12月中旬には矢川から安部田方面を移動し国道165号線を横断して三本松青葉寺と三本松駅に向かう右側周辺の山中で電波受信がありました。

気温低下で山中の暖かい場所に固まり大きく移動せず受信が困難な日が多くありました。

名張A群移動状況 平成29年11月22日～12月20日

指導員報告

A群は11月下旬からは、中知山青蓮寺ダム湖と比奈知ダム湖周辺の山中と道路で目視しています。

12月初旬は名張曾爾線沿いの香落橋付近とダム湖青蓮寺橋、弁手橋間の山中でいました。

12月中旬には中知山集落から青蓮寺ダム湖周辺の山中でいましたが、比奈知ダム湖周辺の山中と上比奈知集落に移動しヒコバエを捕食する光景を目視しました。

